

# 会員だより

## カラオケの思い出

私は若いころから歌謡曲（特に演歌）が好きでした。昭和40年代ごろからカラオケが流行りだし、職場で歓迎会、送別会、研修会の後の宴会などで、必ずカラオケが始まりました。

いつも謹厳で怖い上司が、眼をつむり、首を振って思い入れたっぷりに「いいのちいれれない」と黄色い声を張り上げて歌われたのには驚きましたが、微笑ましいようなうれしい気がしました。私は声量はないし、好きな割には情緒たっぷりの歌い方が出来ず、友だちからは性格通り？真面目過ぎると言われ、我ながら下手だなと自覚はしていましたが、順番が来てどうしても歌わないという立場が持てないということもあり、歌わされていま



あるとき「グランドホテル」で上司の送別会があり、私の順番が来て、

美空ひばりの「ある女の詩」

を歌いました。するといつもになく、声は朗々と出るし声量もないのに細かいところまで声が伝わるような気がしました。そしてみんなに大うけしたので、私の一世一代の晴れ舞台でした。考えてみると大きなホテルのカラオケ設備がそれだけ性能が良かったのです。

その後、そんな幸運に恵まれたことはありません。リタイア後、毎年いろんなグループと年一回の同窓会にもカラオケで楽しんできましたが、年齢とともに集まりもなくなり、歌を歌うこともなくなりました。10年以上も経って、カラオケで歌う機会がありませんでした。愕然としました。全く声が出ないのです。そういえば話す言葉も声はかすれ声となり、いかに喉を使っていなかったか思い知りました。おまけに耳が悪いので音程が取れません。ホームでもカラオケのレクがありますが、歌入りの曲を流して、みんなで歌ったり、童謡などで楽しむくらいです。なお不思議なことがあります。今、私の日常が演歌に乗っ取られていきます。私の脳が私の意志に関係なく間断なく

演歌を歌うのです。（食事や人と話したり、何かしているときは歌いません）声には出しませんが、気が付けば歌っています。続けて歌ってみると何の曲かわかるのです。寝るときも演歌をうたいながら眠りに入ります。脳の一部がどうにかなっているのでしょうか。

記：牧戸富美子



## 高槻市バス 終点さんぽに誘われて

広報高槻12月号の市バス終点さんぽのキャッチフレーズに興味をそそられた。12月7日、友人とまずは梶原東行きに乗ることにしたが、待ち合わせミスで予定のバスを逃してしまし、慌てて次のバスの成合行きで警手小前から歩き出して、逆コースをたどることにした。バスを降りて名神高速を左手に見ながら、東に向けて歩き出すと、10分くらいで警手の杜神社の前に来た。鳥居をくぐると夜啼き石という奇岩が安定よくドーンと構えている。その昔高槻城に移したところ、「安満へいの〜」と啼いたので、

もとの場所に戻したという伝説がある。神楽殿には鹿が描かれた大きな額が掛かっているが、この安満一帯は奈良春日大社の荘園になっていたそうで、奈良の鹿と縁があるらしい。毎年5月5日に行われる馬祭を令和2年のニュースで聞かなかつたのはやはりコロナの影響か、令和3年には復活してほしいもの、コロナの収束を願って二礼二拍手一礼で参拝する。



警手の杜神社 神楽殿の鹿の額絵



法照寺本堂



畑山神社 鳥居の向こうに寺の山門

次に訪れたのは檜尾川が南下するあたりにある日蓮宗の法照寺だった。

菩提寺だが何より毎年春場所の頃、JRから相撲部屋の見える事で知られている見晴らしの良い所にある。境内の枯れ葉を掃除しておられた住職の奥様の人柄の良さにも魅かれて、夏には水鉢の蓮の花を見に来たくなった。旧西国街道沿いには日蓮宗のお寺が次々と続いている。15分もしないうちにまた日蓮宗の、昔梶原寺と呼ばれていた田中寺（でんちゅうじ）の標識がみつかった。このお寺と畑山神社が隣り合わせにあり、昔は一体となっていた。



一乗寺 樹齢800年のクスノキ

明治新政府の神仏分離令により神道と仏教が分離されて、日本あちこちに共存している所はあるが、畑山神社のように社頭に鳥居と寺の山門が同時に見られるのはその証しであり、珍しいらしい。たまたま境内に普段着で出てこられた田中寺のお住職

さんには気さくに講話ともダジャレとも知れない会話をされたのはまた珍しい。改めて講話を聞きたいものだ。

記：写真：上村サト子